第3章　書きかえられていないものを「神話」から考える

本論の第I部第3章において、グリム兄弟が書きかえていないものを取り上げたが、本章ではそれらの話をもう一度グリム兄弟の「昔話—神話観」に照らして考察し直していく。

まず最初に、アルニムの指摘にもかかわらず、『昔話集』に残された3つの話から見ていきたい。

「ねずの木の話」(KHM 047) は継母に殺される男児の話であったが、グリム兄弟が何より注目していたのは、その中の神話的な要素であろう。『神話学』の「魂」の章には、人体から遊離した魂がしばしば花として開花したり、鳥として舞い上がったりするという記述があり (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 689)、その一例としてこの「ねずの木の話」で「ねずの木から、殺された兄が鳥の姿で飛び立っている」[1] ことが取り上げられているからである (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 691)。

最後にこの男児は人間の姿に戻ることが出来るのだが、そのことにもグリム兄弟は同様に着目している。死者が生き返るのは昔話にしばしば登場するモチーフであり、グリム兄弟はこの「ねずの木の話」に付けた注釈の中で、「のんきもの」(KHM 081) や「フィッチャーの鳥」(KHM 046) にも死んだ人を生き返らせる場面があること、さらに、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』にも「溺れた子」(62番)[2]という話があることを指摘している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 91)。死者の復活はまた、北欧神話を彷彿とさせるものでもあり、上述の注釈の中で、さらに次のように述べられている。

> トールは食べられた山羊の骨を集め、(槌を) ふって再生させている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 91)。

同じことは、『神話学』の「ドナー神」[3]の章でも言及されているが[4]、この再生の話はスノリの『エッダ』で語られている。トールがロキとともに、山羊にひかせた車に乗って出かけ、ある百姓のところで宿をとった時の出来事である。

> トールは山羊をつかまえて二頭とも殺した。それから皮を剥いで鍋のところまで運び、料理ができあがると、連れの者と一緒に夕食の席についた。トールは、百姓とそ

---

[1] 妹が、死んだ継兄の骨をねずの木の下に埋める。するとそこから美しい鳥が一羽飛び出すのである。

[2] この伝説の概略は以下の通りである。湖で溺れ死んだ子どもの骨を、返してくれるように母親が頼む。すると嵐で骨が打ち上げられる。それを布でくるみ教会に持って行くと子どもが生き返る。ただし、小指の骨が欠けている。

なお、この話は、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』第8巻第9章にも挿話として出てくるものである。

[3] トールはドイツではドナーと呼ばれている。

[4] 『神話学』では、「ねずの木の昔話」において切り刻まれた人間の復活が扱われている、という同様の指摘がなされている (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 154)。

> の妻子を食事にさそった。百姓の息子の名はスィアールヴィといい、娘の名はレスクヴァといった。それから、トールは山羊の皮を火のそばにひろげ、百姓とその家族に、**骨を山羊皮の上に投げるようにといった。**百姓の息子スィアールヴィは山羊の腿の骨をナイフで切り裂き、髄までこじあけた。トールはその夜そこに泊った。そして翌朝まだ明けやらぬうちに起き、衣服をつけ、槌ミョルニルを手にとって振り上げ、山羊皮を浄めた。すると、**山羊たちは立ち上った**が、一頭は後脚がびっこだった (谷口 1973 S. 260f.)。

さらに「ねずの木の話」(KHM 047) の継母が、長持ちの蓋を閉めて少年の首を落す場面は、『エッダ』の『鍛冶ヴェルンドの歌』を想起させる。これについてはグリム兄弟による言及はないが、その類似点は明らかである[1]。なぜならヴェルンドは、長持ちの蓋を使ってニーズズ王の息子ふたりの首を落としているからである。それは、王に捕らえられ足の腱を切られた上に、島に移され、そこで王のために宝を鍛えさせられていることなどに対する復讐として行われたのであった (谷口 1973 S. 96 参照)。

その他、「ねずの木の話」の継母が殺した子の肉でスープを作り、夫に食べさせているところは、『ヴォルスンガサガ』を想起させる。『ヴォルスンガサガ』においてもグズルーンが、兄たちの復讐をするために我が子 (継子ではない) を殺し、その血と肉を夫 (アトリ王) に食べさせているからである (谷口 1979 S. 595f.参照)。

このように「ねずの木の話」は、さまざまな点で (北欧) 神話を彷彿とさせる話なのである。グリム兄弟が、子ども向きでないという批判を受ける可能性も承知の上で、あえてこの話を『昔話集』に掲載したことの大きな要因はそこにあるのではないか。

次にアルニムが指摘していたのは、**「漁夫とその妻の話」**(KHM 019) であった。

この昔話の中の漁夫の妻の願いを叶えるひらめに関しては、やはり『神話学』の「家の精」(Hausgeister) の項に次のような記述がある。

> 水の精や森の精と同様に、家の精の中にも人間に仕えることなく独立して暮らすものもいる。それらが人間に捕らえられると、逃がしてもらうために贈り物をしたり予言をしたりする。**子どものための昔話に出てくるひらめ**もこの種のものである (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 425)。

こうしてひらめが「家の精」と関連づけられるだけでなく、インド・ヨーロッパの共通の源を想定していたグリム兄弟らしく、言及はさらにインドの叙事詩との関連にも及ぶ。

> インドのかの叙事詩の導入部、つまりブラフマーが魚の姿となってマヌに自分を捕らえさせ、未来を予言するというところは、我々のもとに現存する**子どもの昔話**——全能の小さなひらめ (butt[2]) もしくはかわかます (hecht) の昔話——の中にまだ残っ

---

[1] この類似点は、ライエンも指摘をしている (Leyen 1958 S. 24)。

[2] 小文字論者のヤーコプは、『神話学』では、文頭と固有名詞以外には小文字を使用している。

ている[1](J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 480)。

ヤーコプが意図するのはインドの『マハーバーラタ』[2]の中でマヌに自分を捕らえさせるために魚の姿となったブラフマー神[3]の話である。『マハーバーラタ』の該当する場面を見てみよう。

> マヌ (十四人の人類の祖マヌの一人で七番目のマヌ) が河の辺りで苦行をしていると一匹の魚が寄ってきて、こういった。
> ——聖仙さま、わたしはご覧のような小魚で、大きな魚が怖くてなりません。どうか哀れと思って助けて下さい——
> マヌはそれをきくと、掌で掬い上げ壷に入れてやった。[...]
> すると魚は、にこやかに笑ってこういった。
> ——マヌよ、今まで親切にしてくれて有難う。そのお礼に大事なことを教えて上げよう。[...]
> わたしは誰あろう創造主ブラフマーである。魚に化身し、お前たちをこの世の終りから救ったのだ」(山際 1991ff. 第二巻 S. 228f.)。

グリム兄弟は、この話の中にも、インドのものとの関連までをも示唆する、伝承としての重要性を認めていたのである。

そして、**「狐の奥さまの結婚式」**(KHM 038) が、アルニムが淫らな連想を呼ぶという指摘をしていたもうひとつの話であった。

『昔話集』の初版 (1812 年) に付けた注釈を見ると、この話の中で狐が死んだり仮死の状態になるところに、フランス詩のルナールが仮死状態になるところ[4]との関連を見出していたことが分かる (Grimm 1986 Bd. 1 S. XXVII)。ただし、グリム兄弟はフランスの話に見られる猥褻さは、フランスの作家によって付け加えられたものであり、本質としてこの話にもとより属しているものではないと考え[5]、子どもたちがこの昔話から猥褻な印象を受け

---

[1] その他、グリムの『昔話集』には、「金の子どもたち」(KHM 085) という話があり、この話の冒頭においても、漁師に捕まえられた金の魚が、あばら家を城に変えるという条件で自分を見逃してくれるように頼んでいる。

[2] 18 巻より成るインドの叙事詩で、『ラーマーヤナ』とともに知られている。前 10 世紀頃に起こったと思われる、バラタ族の領土にまつわる親族間の争いを主題とする物語を吟遊詩人が伝えたもので、それに様々な要素が混入し、後 5 世紀頃にほぼ現在の形に近づいたと考えられている。1〜5 巻は戦争の経緯を物語っている。ここで扱うのは第 2 巻に含まれる話である。なかでも第 3 巻に収められた『ナラ王物語』が特に有名である (平凡社 『世界大百科辞典』第 27 巻)。

[3] ヒンドゥー教の造物主である。ブラフマーは宇宙卵をふたつに割り、天と地を創ったとされる。

[4] 邦訳では『狐物語』第十五話の「ルナールの死」で、ルナールは気を失い、葬式が営まれる (鈴木覺 2002 S. 262ff.)。

[5] アルニム宛の書簡の中で、ヤーコプは、フランスの作家が神聖なものに淫らな見解を付け加えたのだ、ただしその神聖さは失われてしまってはいない、と指摘している (Steig 1904 S. 271)。

る心配もないと判断し、『昔話集』に掲載したのである。それには、自らが子どもの頃に聞いて楽しんだという思い出も一役買っているようだ[1]。加えて、この話にも神話的な要素が見出されていたことが、決定的な要因として考えられる。『神話学』の「木と動物」の章には次のことが記されている。

> スレイプニル[2]には 8 本の脚が、また英雄や神々には 4 本の腕が与えられているのと同様に、子どものための昔話 (38 番) の中では、それ (=狐) に 9 本の尻尾が与えられている (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 557)。

すなわちグリムは、狐の 9 本の尻尾は、ボティックハイマーが指摘するような性的な意味にではなく、神話的なものとの解釈をしていたのだ。

少なくとも『昔話集』に関しては、性的なことに関する指摘に対しては神経質と言われるほどの反応をしていたグリム兄弟ではあったが (本論第 I 部第 2 章第 4 節, Tatar 1987 S. 19 参照)、こうして神話的な要素を見出していたものは、アルニムの指摘を受けつつも、『昔話集』に残しているのである。

さて以下の 4 つの節では、第 I 部第 3 章の「書きかえられていないもの」の項での記述に即して、ひとつずつ神話的なものとの関連を確認していきたい。

第 1 節　道徳に関して

嘘に嘘を重ね、しまいには罪のない羊飼いを身代わりに殺させる、という市民的な道徳とはおよそ相容れない行為が語られる**「小百姓」**(KHM 061) から見ていきたい。

ヤーコプは、『10 世紀と 11 世紀のラテン語の詩』(1838 年)[3]の中に、ウニボス (Unibos) というラテン語の詩を掲載している。これは、11 世紀頃にフランスもしくはオランダの聖職者がまとめたものであるが、この詩の内容が、「小百姓」に似ているのである。まずはこの詩の内容を、ボルテ／ポリフカによる要約に従って見てみよう。

ウニボスと呼ばれる、1 頭の牛しか持たない貧しい百姓がいる。森で金の入った壺を見つけるが、その金は、死んだ牛の皮を売って手に入れたと嘘をつく。すると、村長、代官、司祭が真似をして牛を殺すが、皮は売れない。3 人は復讐を遂げに出かけるが、ウニボスは、妻に豚の血を塗り、死んだふりをさせる。そして柳の笛を吹いて、生き返らせる。妻は、以前より美しくなったように見える。3 人は、この笛を買いとり、われ先にと妻を殺して若返らせようとするが、むろん妻たちは生き返らない。次に、ウニボスは馬の尻に金貨を詰めておき、馬が金貨を屁(ぴ)るといって騙し、3 人に売りつける。最後にはウニボスは樽に入れられ、海に捨てられることになる。そこでも、無理やり村長にされるところで困

---

[1] ヤーコプは、自分が子どもの頃にこの昔話を喜んで聞いたものだったと記している (Steig 1904 S. 271)。

[2] スノリの『エッダ』「ギュルヴィたぶらかし」によれば、スレイプニルは最高の名馬で、オーディンの所有する馬だが、八本足」である (谷口 1973 S. 237)。そもそもこれは、雌馬に**変身**したロキが生んだ馬であった (谷口 1973 S. 258f.)。

[3] Jacob Grimm: Lateinische Gedichte des X. und XI. Jahrhunderts. Göttingen 1838.

っていると嘘をつき、通りかかった豚飼いに身代わりになってもらう。3 日後にウニボスは (豚飼いの) 豚の群を連れて戻る。海底にいた群を連れてきたのだという彼のでまかせを信じた 3 人は、海へ入って死んでしまうのである (Bolte/Polívka 1963 Bd. 2 S. 6f.)。

ヤーコプは、この詩を前掲書にラテン語のまま掲載し、その後に注釈を付けているのだが、そこでこの詩と「小百姓」との関係にも言及をしている。

> 実際に、この詩の内容全体は、本来的な意味での民話であり家庭のための昔話である。そしてこの素材が長い間生き続けていることの、ひとつの**重要な証拠**なのである。[...] これは、今日でも「小百姓」、「農夫キービッツ」[1]、「リュチュキ」[2]などの名前で、細部が拡大されたり、縮小されたり、変更されたりして流布しているものである (KM. No. 61) (J. Grimm 1967 S. 382)。

つまり、「小百姓」は、11 世紀に既に語られていた素材が、今日でも生き続けていることの「重要な証拠」であり、そうした意味を持つ昔話であるからこそ、物議をかもす可能性のある話であるにもかかわらずグリム兄弟は『昔話集』に掲載したのだ。このことは、道徳性よりも古さの方に一層の関心があったということを示しているのではないか。

グリム兄弟はまた、この話の類話がイタリアのストラパローラの『楽しき夜毎』(1550-54 年) にも収録されていることを指摘している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 122)。『楽しき夜毎』については、第Ⅲ部にて詳しく言及するが、日本ではほとんど紹介されていないものであるため、ここで簡単に内容を見ておくことにする。

ストラパローラでは、司祭が市場でラバを買っている。しかし 3 人の辻強盗にラバを騙し取られたため、司祭は仕返しを企むのである。本当は普通の山羊なのだが、それは独りで帰宅し女中に伝言を伝えることの出来る山羊だということを信じ込ませ、3 人に高い値で売りつける。騙されたことを悟った 3 人は、司祭を殺しに行く。司祭は、あらかじめ女中に命じて血の詰まった袋をスカートの下に持たせておき、ナイフで女中 (袋) を刺す。すると血が飛び出し、女中は死んだふりをする。司祭はバグパイプをとり出し、女中の尻にあててそれを吹くと、女中は生き返ったかのように動き出す。3 人はこのバグパイプを再び大金で買い取り、妻を殺し、生き返らせようとするが、むなしい。そのため 3 人は、復讐として川に沈めるべく司祭を袋づめにする。司祭は、領主の娘と結婚させられるところなのだが自分は司祭だから困っている、と言って通りかかった羊飼いを騙し、羊飼いが身代わりとなって川に投げ入れられる。一方の司祭は羊飼いの羊を連れ帰り、これは川底から連れて来たのだと偽って再び 3 人の強盗たちを騙す。3 人は、司祭に頼み込んで袋に入れもらい、川底に投げ入れられてしまうのである[3](Straparola 1904 S. 58ff.)。

---

[1] これは、ビュッシングによる昔話である (Volks=Sagen, Mährchen und Legenden. Gesammelt von Johann Gustav Büsching. Leipzig 1812)。なお、この話は、板倉による翻訳がある (板倉 1998 S. 289ff.)。

[2] これは、1794 年に印刷された民衆本にあった „Rutschki oder die Bürger zu Quarkenquatsch“ のことである (Bolte/Polívka 1963 Bd. 2 S. 3)。

[3] アンデルセンの「小クラウスと大クラウス」もこの類話である (これについても本論第Ⅲ部で言及する)。

グリム兄弟はさらに、このようにして騙される愚かな人々は、ラーレ人 (第 1 章第 4 節参照) とも関連があると見なしている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 122)。そうした広いつながりも視野に入れた上で、この話を『昔話集』採用しているのである[1]。

「賭博師ハンス」(KHM 082) は、「必ず勝てるトランプ」「必ず勝てるさいころ」「あらゆる種類の果物がなる木で、その木に登った者はハンスが許可するまで降りられないもの」を神に願い、叶えられる話であった。

確かにこれは道徳を逆手にとった笑話であるため、こうした不謹慎な願い事が叶えられるのだという解釈もできるが (Uther 1996 S. 156)、本論ではグリム兄弟が見出していた神話的な要素に注目してみたい。

まずはこの昔話に付けられた注釈を見てみよう。

> この話の**古さ**は疑いようもない。そして槌を持つ**鍛冶屋**を**トール神**、**死神**と**悪魔**をのろまで不器用な**巨人**と想定すれば、この話全体はうまくまとまった古代北欧的な様相を呈する (Grimm 1994 Bd. 3 S. 154)。

「賭博師ハンス」においては主人公の職業にはふれられていないが、グリム兄弟が注釈の中で紹介する類話の多くでは**鍛冶屋** (Schmied) であるため[2]、上記のように鍛冶屋と明記されているのである。

さて、この話の主人公に重ねあわされたトールは、北欧神話における空と雷鳴の神であり、投げれば必ず敵を倒すことの出来る鉄槌 (ミョルニル) 等を持っている[3]。投げれば必ず当たるという属性も、昔話風である。

その他、『神話学』には、この話に登場する神には「**さいころ**の発明者」であるヴォーダン[4]を想起せざるを得ないこと (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. XXXI)、そしてヴォーダンが「**賭け事**と幸運の神だった」(J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 132) ことなどが記されている。このように、「必勝さいころ」を与える神の中に、ゲルマン古代の神の名残りをも見出していたのである。道徳的・教育的かという観点からは問題のある話であるが、ここでもやはり伝承としての古さ・重要さにグリム兄弟のまなざしは向けられていたようだ。

既に考察してきたように、グリム兄弟の言及はゲルマンのものに限られてはいない。この昔話についても、ギリシア神話のシシュポスとの関連が、『神話学』の「死神」の章と (J.

---

[1] 1810 年手稿では、「ヘンデさん」(KHM 061a) という類話が書き留められていた。この話の詳しい経緯については、第 I 部第 2 章第 4 節 3 参照。

[2] グリムが取り上げているもの以外にも、例えばベヒシュタインの『ドイツ昔話集』に掲載されている Der ***Schmied*** von Jüterbogk という類話がある。(グリムが 7 番目に紹介している類話も Jüterbock という地名の出てくる話であるが、ベヒシュタインのものとは内容は多少相違している。) なお、ベヒシュタインについても、本論では第Ⅲ部で詳しく扱う。

[3] その他、神力を倍にする力帯、槌の柄を握るのに欠かせない鉄の手袋の 3 つを持っている。不倶戴天の敵である巨人族を撲滅するために、トールはしばしば遠征に出る。その際に 2 匹の牡山羊にひかせた車に乗っていく。その轟きが雷鳴なのである。車をひかせている山羊を食べ、骨から生き返らせる話に関しては、本章冒頭で KHM 047 についての言及の中で引用した。

[4] ゲルマン神話の主神。『エッダ』のオーディンに相当する。

Grimm 1992 Bd. 2 S. 712)、『注釈篇』の両方で取り上げられている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 155)[1]。この関連で着目されたのは、ハンスが3つ目の願い事として、他の人が一度登るとハンスが降りるよう命じるまで降りられなくなる木をもらい、後に死神をその木に追いやり、7年の間ひとりも人間が死なないことになる場面である。

一方のシシュポスは、ゼウスの行為を覗き見し、告げ口をしたため、怒りを受ける場面である。

> こうして、この厚かましく覗き見する男は、神々の怒りを一身に受けたのである。ゼウスは**タナトス（「死」）を彼に送った**。しかしシシュポスはこのタナトスも折よく見つけてしまった。シシュポスがこの死神をいかに策略にのせたかを知ることができたら楽しかろうが、その物語は失われてしまっている。いずれにせよ彼はうまくやって、**死神を丈夫な鎖につないでしまった**。軍神アレスが**タナトスを解放して、シシュポスを彼に引き渡さないうちは、地上ではだれも死ななかった** (ケレーニイ 1994 (植田訳) S. 75f.)。

このように、死神を拘束し、地上で誰も死なない期間が生じるところが一致している。この一致をグリム兄弟は共通の源に由来するためとみなしたのだ。

また、さいころ (ダイス) が中世以降、教会によって禁じられ、不謹慎なものとされていたことは、第I部第3章で指摘した通りだが、ゲルマン人は古来、賭け事を好んでいたのである。タキトゥスの『ゲルマーニア』には以下の記述がある。

> 彼らは賭博、――まことに不可思議なことではあるが――彼らはこの賭博を、酔ってはいないときにも、あたかも真摯な仕事であるかのように行ない、しかもすべてを失なった場合、最終最後の一擲(てき)に、みずからの自由、みずからの身柄を賭けても争うほどの、勝負に対する無謀さである。負ければ、進んで他者の奴隷となり、たとえ自分が〔勝った者より〕より若く、より力強くても、身の束縛をうけ、売買に供されるのを耐え忍ぶ。蔑視すべき事柄における彼らの頑固さは、まさにかくのごとく、しかも彼らみずからは、これを「義」fides と呼ぶのである。この事情による奴隷は、勝ったものも、またみずから、その勝利の心苦しさからまぬがれるために、取引を通じて売り放してしまう (タキトゥス 1979 (泉井訳) S. 112)。

そして、さいころをする場面は、さまざまな物語の中で語られてきた。一例として、前述の『10世紀と11世紀のラテン語の詩』の中の「ルーオトリープ」(1050年頃)[2]を挙げることができる。

---

[1] シシュポスについては、『イーリアス』の第六書150行に「シーシュポスとて、人間のうちにもわけて慧(さか)しい者があった」と歌われている (ホメロス 1981 (呉訳) S. 224)

[2] 故郷を後にし、異国の王のもとで忠勤に励んだ主人公は、帰郷する際に、主人からほうびとして12の叡智の教えを授けられる。これは、処世術を伝える「召使のよい忠告」という昔話の型に属する話である。

彼女は、彼に**さいころゲーム**の相手をするように乞うた、
三度勝った方に負けた方が指輪を贈るということで。
そこで彼は言った。「勝負をして勝ったごとに、
自分の指輪を渡すことにしましょう」
彼女はこれに同意し、彼を打ち負かした。
彼は喜んで敗れ、喜んで彼女に指輪を渡した (丑田 1999 S. 296f.)

「ルーオトリープ」はヤーコプの本に収録されている詩であり、一方でタキトゥスは『注釈篇』や『神話学』でしばしば引き合いに出されている。そのため、グリム兄弟が「さいころ」を (道徳的観点から否定するのではなく) そうした伝統の中に位置付けていたことが、充分に考えられるのである。

第2節　性に関して

「子どもの本」ということが考慮されるようになり、性にまつわるものがグリム兄弟によって慎重に取り除かれていったことは、本論第I部第2章で考察した通りである。これはまた同時代の昔話集の編者にも共通して見られる傾向であるので、本論の第III部においても考察することになる。

さて、グリム兄弟が性に関する事柄を『昔話集』から取り除く一方で、性的な連想を呼ぶ可能性のある「狐の奥さまの結婚式」(KHM 038) という話には、に神話的な要素を見出し、『昔話集』に残したことは、既に指摘した。その他『昔話集』には「不倫」の話も掲載されており、この関連で取り上げることが出来るが、それは、次節でまとめて取り扱うことにしたい。

第3節　愛情に関して

親子間の酷い行為

「ラプンツェル」(KHM012) は、父親が魔女に子どもを与える約束をする話であり、それはビーダーマイヤー期に重んじられていた「親子間の愛情」を美化するような書きかえとは相容れないものであった。

その「ラプンツェル」への注釈を見ると、「デンマークの民謡、例えば野生の夜の烏 (Nachtrabe) の歌においても同様の約束が交わされている」とある (Grimm 1994 Bd. 3 S. 34)。これは、ヴィルヘルムによる『古代デンマークの英雄歌』に掲載されている「夜の烏」(Der Nacht=Rabe) のことである (W. Grimm 1811 S. 150ff.)。その内容を見てみよう。

夕刻しか飛ぶことを許されていない烏がいる。烏は、憂い顔の乙女 Irmindlin に、何を悩んでいるのかと尋ねる。乙女は、継母によって花婿が連れ去られてしまい、継母の妹の息子 (トロル) との結婚を強いられているのだという。さらに兄も魔法をかけられ、異国にやってしまったと嘆く。

次に夜の烏は、花婿のところに連れて行ったら何をお礼にくれるか、と尋ねる。金や銀を与えようという Irmindlin に向かって、夜の烏はこう応える。

あなたの金や銀や贈り物は、とっておきなさい。
それより、あなたが彼（花婿）と産むことになる**最初の息子が欲しい**（W. Grimm 1811 S. 151）。

その約束を取り付けると、烏は彼女を背中に乗せ、花婿のもとへと連れて行く。ふたりの結婚式の 40 週後に息子が誕生する。烏は何を誓ったかを Irmindlin に思い出させる。ふたりは子どもの代わりに金や国の半分を提供しようとするが、烏はそれを聞き入れず、子どもを手に入れる。

そして烏は子どもの右の目をくり抜き、心臓の血を半分飲む。
すると烏は、これまで地上にいたうちで、最も美しい騎士になった。
これまで人々が目にしたうちで、最も美しい騎士となった。
これは Irmindlin の兄だった。彼は長いこと消息を絶っていたのだ。
その場に居合わせたすべての人は、むきだしの膝で跪き
天の国におわします神に祈りを捧げた。子どもは再び生を受けた（W. Grimm 1811 S. 152）。

最後には、Irmindlin には夫も兄も息子もいることになり、大団円で終わっているとはいえ、非常に残酷な場面を含んでいることが目を引く。ここで歌われているように、子どもの命の犠牲によってある人が生き返り、その後で子ども自身も命を取り戻すところは、本論にて次に取り上げる「忠臣ヨハネス」を彷彿とさせる。

そのことはさておき、グリム兄弟は子どもに対する愛情を強調するような加筆を行ってはいたが、「最初に生まれる子どもを報酬として約束する」というそれに相反する行為でさえも、簡単に取り除いてはいないことが分かる。そこにもやはり古い伝承とのつながりを示すものを保持する姿勢が感じられるのである。なお、同じ約束は、『昔話集』では、その他にも「ルンペルシュティルツヒェン」（KHM 055）でも取り交わされている。

「忠臣ヨハネス」（KHM 006）にも、自分の子どもを犠牲にして、その血で忠臣を救うという残酷な場面があった。グリム兄弟がそこに何を見ていたかということのヒントは、やはり注釈の「これは明らかに忠実な友アミクスとアメリウスの伝説である」（Grimm 1994 Bd. 3 S. 30）という記述だろう。

「アミクスとアメリウス」は、フランスで生まれ、ヨーロッパ各地に広まっている伝承である（EM Bd 1 S. 458）。現存する最古の話（おそらく 1090 年頃と推定されている）の内容を、『昔話百科事典』の内容紹介に従って見ておきたい[1]。

アメリウスとアミクスは、カール大帝の甥にあたる王の宮廷に仕える貴族である。アメ

[1] この伝承は 12 世紀頃から聖者伝に変わっていった。このラテン語聖者伝 Vita Sanctorum Amici et Amelii carissimorum は、13 世紀初頭に忠実にフランス語に訳された。このフランス語版「アミとアミルの友情」には邦訳がある（神沢 1991）。

リウスは王の娘と恋仲になるが、そのことが王妃に密告されてしまう。そこで決闘が行われることになる。アメリウスはアミクスに身代わりを頼む。このふたりは姿も声もよく似ていたのである。アメリウスはアミクスの妻のもとに潜伏するが、床の中ではふたりの間に剣を置いておく[1]。アミクスは決闘で勝利をおさめ、アメリウスは王女との結婚を認められる。ところが後にアミクスがらい病にかかり、妻に追放され、アメリウスのところに身を寄せる。医者が子どもの血をもってしかこれは治癒しえないと告げたため、アメリウスは、自分の息子たちを殺して友を救う。そして子どもたちもめでたく生き返るのである(EM Bd 1 S. 454ff.)。

この伝承だけでなく、さらには『哀れなハインリヒ』[2]にもグリム兄弟は言及をしている(Grimm 1994 Bd. 3 S. 30)。ヨハネスを生き返らせることが出来るのも、王の息子の血だけであるように、『哀れなハインリヒ』において、らい病になったハインリヒを治すことが出来るのは、純潔な乙女の心臓の血だけだからである。一見残酷な「子殺し」にも、グリム兄弟はこういったつながりを見出していたのである。

夫婦間の酷い行為

「本当の花嫁」(KHM 186) で語られているように、花嫁が忘れられてしまうことは伝承の中では珍しいことではない。『昔話集』の中では、さらに「王様のふたりの子ども」(KHM 113) と「太鼓たたき」(KHM 193) においても語られている。

> 最初の婚約者を忘れるというのは、多くの話に繰り返し出てくる。(例えば「恋人ローランド」(KHM 056)、「鳴きながら跳ねるひばり」(KHM 088)など)。この話の根底は深い。その重要な例を2つだけ挙げておく。ドゥフシャンタ王はシャクンタラーを忘れ、シグルズはブリュンヒルドを忘れる (『昔話集 注釈篇』より、Grimm 1994 Bd. 3 S. 129)。

婚約者を忘れるということは、美化されていった愛情にもとる行為ではあるが、グリム兄弟の上記の指摘にも見られるように、やはり多くの伝承とのつらなりの中で捉えられていたのだろう。シャクンタラーに関しては第II部第2章第2節で、ブリュンヒルドは第1章冒頭で指摘した通りである。

「ヒルデブラントじいさん」(KHM 095) では、司祭が巡礼に行くようにと勧める山の名前がゲッケルリ山 (Göckerliberg) だったことから注目していきたい。このことは、『神話学』の「樹木と動物」の章で言及されているのだが、そこではまず、ギリシア神話でゼウスが郭公の姿となり、ヘラを誘惑することが取り上げられるので (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 566f.)、その場面を見ておく。

---

[1] 床の中でふたりの間に剣を置くことは、『昔話集』では「ふたりの兄弟」(KHM 060) に、その他では『トリスタンとイゾルデ』、『ヴォルスンガサガ』などでも語られている。

[2] グリム兄弟は、1815年に共同で『ハルトマン・フォン・アウエの哀れなハインリヒ』(Der arme Heinrich von Hartmann von der Aue. Berlin) を刊行している。

> ゼウスはヘラが他の神々からはなれて、ただ一人でいるのを見て、彼女を誘惑しようとした。そこで、ゼウスは**かっこうに身を変じて**、いま述べた山上にいた。同じ日、ゼウスは恐ろしい嵐を送った。女神ヘラはひとりで山上に登って、のちにヘラ・テレイア（「かなえられたヘラ」）神殿が建つことになる場所に坐っていた。かっこうは彼女をみると、身を震わし、固くなって、彼女の膝にとまった。女神はその鳥をあわれんで、彼女の衣でくるんでやった。すると、たちまちゼウスが正体を現わし、彼女を愛人にしようとした（ケレーニイ 1995 (植田訳) S. 113)。

『神話学』の記述においてヤーコプは、この「郭公の山」はドイツにもあり、それは『昔話集』では 95 番（=KHM 095）の Göckerliberg なのだと続けている。そしてこの名前は、郭公の鳴き声に由来するものだと主張するのである (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 567)。このように一見飛躍しているようにも思える指摘は、グリムらしいが、「ヒルデブラントじいさん」が『昔話集』に掲載されるにあたって、そうした神話的な要素が考慮されたことは想像に難くない。

これに加えて、『昔話集 注釈篇』には、この話にあるような妻の不貞が『ヒルデブラントの歌』やオデュッセウス（ウリクセス）に関する伝承にも場合によっては見られるものだということが記されている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 185)。グリム兄弟は、やはり、道徳的かどうかということよりも、伝承の古さへの関心を優先させ、この話を採用したと言えるのではないか。

第 4 節　残酷さに関して

次に、第 I 部第 3 章で指摘した話の残酷さの考察に移りたい。

「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) と**「みつけ鳥」**(KHM 051) はどちらも、子どもが食べられていまいそうになる話であった。

これに関しては、やはり『神話学』の「魔法」の章に次のような記述がある。

> 我々の今日の昔話は、魔女を森の女として描いている。この森の女は、子どもを食べるために食事を与えて太らせるのである (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 905)。

そこにおいて、「昔話集の 15 番」すなわち「ヘンゼルとグレーテル」が指示されていることが、この昔話の中にも神話の残滓としての価値が認められていたことを示している。

さて、本論で引用に用いている『神話学』の第 3 版は 1854 年に刊行されたのだが、ヤーコプはさらなる改訂を予定しており、その準備として著者保存本にメモを書き込んでいる[1]。

---

[1] これはマイヤー (Elard Hugo Meyer) の手によって『神話学』の第 3 巻として刊行されている (Grimm 1992)。『神話学』の第 3 版は、第 2 版に手を加えずに再販したものであるため（ただし、序文に 5 行補足はしている）、ヤーコプが改訂版のための書き込みに用いていたのは、『神話学』の第 2 版である。

そして、上記の記述が掲載された頁には、次のような書き込みがなされている。

> 魔女の食事には、たいてい少年が殺され、煮るなり焼くなりして食べられている。これは、古い異教の巨人の習慣を思い起こさせる。子どもを殺し、煮て食べるというのは、古くからの重要な筋である (J. Grimm 1992 Bd. 3 S. 312)。

ここでは、昔話の 15 番 (=「ヘンゼルとグレーテル」) と 51 番 (=「みつけ鳥」) のどちらもが指示されている。食人は残酷な行為ではあるが、これを古くて重要な筋であると考えていたことが、『昔話集』に手を加えずに残していることの大きな要因と言えるだろう。

「トルーデおばさん」(KHM 043) は、少女が丸太に変えられて、火にくべられてしまう話であった。この昔話の中にも明記されているように、トルーデおばさんは魔女である。上述の魔女に関する『神話学』の記述には、次の部分が続いている。

> (捕まった子どもが) 逃げると、魔女は七里靴で追いかける (KHM 051, KHM 056, KHM 113)。**トルーデおばさんの昔話**においては、魔女はむごたらしく少女を丸木として火にくべ、それで悠々と暖まっている (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 905)。

このように『神話学』で言及するだけの神話的な価値が見出されていたのが、まさに残酷な終結部だったのである。「名づけ親さん」(KHM 042) の場合と同様に書きかえることはたやすいが (「名づけ親さん」では、最後に男が悪魔に殺されそうになりつつも、結局は助かることにグリム兄弟が書きかえている。第 I 部第 2 章参照)、「トルーデおばさん」においては、少女を燃やし、その火で体を暖めるというところが重要だったため、そのような変更はなされなかったのである。

「乞食のお婆さん」(KHM 150) は、お婆さんが火に近寄りすぎたために、服が燃えてしまう話であった。悪いこともしていない乞食のお婆さんが燃えてしまうという不幸な話であるが、この昔話にはグリム兄弟は次のような注釈をつけている。

> 注目されるのは、乞食の姿に身をやつしたオーディンが、グリームニル (仮面をかぶる者) と名のって王宮に立ち寄り、彼の服が燃え始めてしまうことである。ひとりの青年が飲みものの入った角杯を彼に渡す。別の男が、彼を火の間に座らせたからだ。この男は、巡礼者が放浪する神であることに気づくが、それは遅すぎた。神を炎の中から引き出そうとするが、自分の刀に倒れてしまうのである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 245)。

ヤーコプが『神話学』の第 2 版 (1844 年) の著者保存本に書き込んだメモにも、この昔話と『エッダ』との関連が次のように明確に示されている[1]。

---

[1] 『神話学』の序文にも同様の記述がある。das märchen von der alten bettelfrau gemahnt an Grimnir.

> ドイツの「乞食のお婆さん」(KHM 150) の昔話は、グリームニルを想起させる。というのも、乞食のお婆さんと同様に、グリームニルも服が焼けてしまうからだ (J. Grimm 1992 Bd. 3 S. 56)。

グリム兄弟は明確に指摘してはいないが、オーディンがここで名乗るグリームニルという名前から、これが『エッダ』の中の「グリームニルの歌」であることが分かる。

「グリームニルの歌」では、フラウズング王のふたりの息子のうち、兄のアグナルが死去したため、弟のゲイルロズが王位を継いでいる。オーディンはある時、ゲイルロズが吝嗇かどうかを確かめるべく、グリームニルと名のり、彼の城へと赴くのである。

> 男は黒いマントに身をつつみ、グリームニルと名のったが、きかれても自分のことをそれ以上何もいわなかった。王は彼の口を割らせるため、拷問として二つの**火の間にすわらせた**。グリームニルは八夜の間そこにすわり続けた。ゲイルロズ王には十歳になる息子がいて、王の兄にちなんでアグナルという名だった。アグナルはグリームニルのところに行き、なみなみとつがれた**角杯を**飲むように**手渡し**、無実の人を苦しめるとはひどい、といった。グリームニルは杯をほした。そのとき、火は、グリームニルのマントが燃えるほどのところまできていた (谷口 1973 S. 52)。

その後、グリームニルと名乗る男は、自分が他ならぬオーディンであることを明かす。

> ゲイルロズ王は坐って、剣を半ば抜いて膝の上においていた。だが、ここにやってきたのはオーディンだということをきくと、立ち上がってオーディンを火のそばから引き離そうとした。すると、彼の手から刀身がすべりおちた。柄頭が下をむいていたのだ。王はつまずいて前のめりに倒れ、剣は彼を刺し貫き、彼は死んだ。そのとき、オーディンは消えた。だがアグナルがそこの王になってその後ながく治めた (谷口 1973 S. 57)。

この引用からも分かるように、これは「乞食のお婆さん」とは何の関係もないように思える神話であるが、グリム兄弟は両者の間につながりを想定したのだった。

「蛇の話」(KHM 105) の第 1 話は、罪もない幼い子どもが死んでしまう話である。なぜこのような話が掲載されているのかということのヒントもやはり『神話学』にある。

> 家の中でも、ひとりぼっちの子どもたちのところに蛇がやってくる。蛇は子どもたちと一緒に器からミルクを飲む。蛇は金の冠をかぶっており、ミルクを飲む時には、それを頭からはずして地面の上に置く。そして帰る時に忘れていくこともある。蛇はゆりかごにいる子どもたちを護り、もう少し大きな子どもには宝を見せる。**その蛇を**

(J. Grimm 1992 Bd. 1 S. XIII)

殺すことは不幸をもたらす。どの村にも固有の蛇がいる。[...] ヘッセンの伝承は、子どものための昔話の 105 番に集めた (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 571)。

さらにポンメルンの伝説にも同様のものがあり、「両親が蛇を殺すとその子はやせはじめ、じきに死んでしまう」(J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 571) という指摘が続く。

この話においても、何の罪もない子どもが死んでしまうというかわいそうな箇所が変更されていないのは、まさにその箇所が伝承として重要なところだと見なされていたからだろう。

「きょうかたびら」(KHM 109) は、罪もない幼子が死んでしまい、母親の涙がきょうかたびらを濡らすという話であった。ここにもグリム兄弟は『エッダ』の「フンディング殺しのヘルギの歌 II」(Str. 44) とのつながりを見出していたのである。なぜなら、そこでは、亡くなった人を悼んで流した涙が墓の中の屍にふりそそぎ、死者の安息を妨げるという信仰が現れているからである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 202)。

「ヘルギの歌」のシグルーンは、父親の意に従わずに、ヘルギと結婚する。ヘルギはシグルーンの父親ら一族を殺す。しかしその中でたったひとり生き残ったダグによって、彼は後に倒される。そのためシグルーンは夫の死を悲しみ、涙を流すのである。

そして墓の近くにヘルギが姿を現すようになる。彼は開いた傷口から血を流しており、シグルーンが話しかけると、彼は次のように説明するのだ。

> ヘルギ
>
> 「セヴァフィヨルのシグルーンよ、ヘルギが、悲しみの露 (血) にぬれているのは、そなたのせいなのだ。太陽のように輝く、黄金で飾られた南の娘よ、**そなたは寝る前に苦い涙を流して苦しむ。それがわたしの胸の上に冷たくおちて、悲しみのため重くなり、燃えるような血になるのだ**」(谷口 1973 S. 124)。

『エッダ』の中のこの場面と、昔話の中で母親の涙がきょうかたびらを濡らすというところが関連づけられていたため、罪もない子どもが死ぬというかわいそうな場面は、その要因となる箇所であるため、削除 (もしくは変更) されることがなかったのだろう。

「7 羽の烏」(KHM 025) には、ガラスの山を開けるために必要なひよこの骨を失くしてしまったため、娘が自分の小指を切り落とすという残酷な場面があった。

ガラスの山は、古くから伝承にしばしば登場するもので、本章でとりあげた『古代デンマークの英雄歌』などでも歌われているものである (第 1 章第 1 節参照)。

ヤーコプはこのガラスの山を、死者が登らねばならない険しい山の信仰と関連づけている。そして『神話学』の「魂」の章には、リトアニア人[1]は、死者がそうした山に登ること

---

[1] リトアニアについて、ヤーコプは『ドイツ語史』においてこう述べている。「私の研究の成果なのだが、私たち**ゲルマンの言語**は、まずは血縁的にスラヴ語と**リトアニア語**の仲間である。そして少し距離をおいてギリシア語とラテン語の仲間である」(J. Grimm 1848 S. 1030)。

が出来るように、オオヤマネコと熊のかぎ爪を一緒に埋葬もしくは火葬する、という記述がある (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 697f.)。さらに、このガラスの山についての記憶は、今でもドイツの昔話や民謡の中に残っているとし、「7 羽の烏」を引き合いに出しているのである。そこでのひよこの骨は熊の爪と同様のもので、少女は山に差し込むためにそれを持って行くが、無くしてしまい、山によじ登る (もしくは山を開く) ために、自分の小指を切り落としている、この少女は冥界において、失踪した兄たちを探していると考えてよいだろう、と述べている (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 698)。

「7 羽の烏」においても、特にこの箇所に神話的な価値が見出されていたため、ここが削除されることはなかったのだろう[1]。

この関連ではさらに、グリム兄弟が注釈の中であらすじを紹介しているハーナウの類話にも着目できる。その中で若者は、宿屋で鶏肉を出され、その骨を集めている。それを用いて、魔法にかけられた王女のいる**ガラスの山**に登るためである。しかし頂上にたどり着くには、骨があと一本足りない。そのため、青年は、自分の小指の骨を切り取って使う。

この話にも出てくるように、小指を切るという行為はガラスの山の話には本質的に結びついている重要な筋であり[2]、かつ神話的背景を持つと考えたようだ。

「3 枚の蛇の葉」(KHM 016) では、美しい王女が、変わった誓いを立てていた。それは王女が先に死んだ場合に一緒に墓に入ることを約束する者とでなければ結婚しない、というものだった。そして、夫は死んだ王女とともに生き埋めにされる。しかし、死んだ蛇の上に仲間の蛇が 3 枚の葉を乗せて生き返らせるのを見て、男は真似をして妻を生き返らせることに成功するのである。

この昔話について、グリム兄弟は注釈において「この (昔話の) 中にはギリシアの伝説が現れている」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 38) と述べているが、それは以下のグラウコスの話である。

> グラウコスは小さな子供のころ、まりで遊んでいたか、あるいはねずみを追いかけていたとき、蜂蜜がいっぱい入った大きなかめの中に落ち、死んでしまった。[...] そこでミノス王は、ポリュイドスにその子を生き返らせよ、と命じ、彼を死んだ子といっしょに墓に閉じ込めてしまった。そのなかでポリュイドスは、蛇が一匹その死んだ子に近づくのに気づいた。彼はその蛇を殺してみた。すると、別の蛇があらわれた。この蛇は、はじめの蛇が殺されているのを見ると、**ある草をもってきて、それを殺された蛇の上に置いた。すると、その死んだ蛇が生き返った。そこで、ポリュイドスもその草をもってきて、それで小グラウコスを生き返らせた** (ケレーニイ 1995 (植田訳) S. 132f.)。

グリム兄弟の指摘は、これだけにとどまらず、「生き残った方も一緒に埋葬されるべきだ

---

[1] ガラスの山に関する信仰とこの昔話に関しては、Lüthi 1989 S. 42ff.にも記述がある。
[2] ベヒシュタインの「白い狼」にも、同様に娘が小指を切り落としてガラスの山に登る場面がある (Bechstein 1999 S. 315)。

という要求を妻がするところは、北欧の伝説のアースムントとアースヴィトを思い起こさせる」と続けている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 38)。それは『デンマーク人の事績』(第 1 章第 1 節参照) にあるアースムントとアースヴィトの話のことである (ちなみに、この話においてはどちらも男性である)。

ビョルン王の子アースムンドは、アースヴィトの父親 (アールブ王) が治める州にやってくる。

> 王子 (アースヴィト) と彼 (アースムンド) は短い交際の後に互いの友情を固めるために、**二人のどちらかが長く生きた場合、先に死んだ者といっしょに葬られることを、あらゆる誓いによって共同宣言した。**というのも、彼らの友誼と愛情の強さは、どちらかもう一方の者が運命によってこの世から奪い去られた場合、自分の命をのばそうと思わないほどだったからだ (グラマティクス 1993 (谷口訳) S. 216f.)。

この話においても、しばらく後に「3 枚の蛇の葉」と同様の事態が起きている。

> アースヴィトは病を得て死に、犬や馬とともに洞窟の中に葬られた。**アースムンドは、友情の誓いのために食べ物を中にいれてもらって、彼とともに生きながら葬られた** (グラマティクス 1993 (谷口訳) S. 217)。

ここでは、アースヴィトは夜になると生き返り、アースムンドと格闘をする。しかしその後、スウェーデン人たちがやって来て、宝を得ようとして墓をあばいたため、アースムンドは、再び地上に戻ることが出来るのであった。

同じ注釈の中で、グリム兄弟はさらに「夫婦間での同様の習慣は、シンドバードの旅にもある」と述べている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 38f.)。それは、船乗りシンドバードの第 4 の航海の話のことである。シンドバードが乗った船が再び難破し、ある島にたどり着く。そこで人喰いたちにあやうく食べられそうになるが、逃れ、島の反対側で彼は美しい婦人を妻とし、暮らし始めるのである (以下の引用文中の「私」はシンドバードを指す)。

> ある日のこと、私の隣の妻女がアッラーの御命令によって、亡くなったのであった。その隣人は友人だったので、私は彼のもとに出向いて、こう言って慰めようとした、「お隣のかたよ、許されているところ以上にお悲しみなさるな。アッラーはそのうちもっと祝福された妻女をあなたに授けて、埋め合わせをして下さるでしょう。願わくはアッラーがあなたの寿命を長くして下さるように！」ところがその隣人は私の言葉にあきれかえって、頭を下げて私に言った、「どうしてあなたは私の長命を祈ることなぞおできになるのか、私はもう一時間しか生きられない身だということは、よく御承知のくせに！」そこでこんどは私があきれかえって、これに言った、「お隣りのかたよ、どうしてそんなふうな言い方をなさり、そのような予感を持たれるのですか？あなたはアッラーのおかげで御丈夫だし、何もあなたを脅かしている気配はなし！ひょっとすると我と我が手で自害なさろうとでもいうのですか？」彼は答えた、「なるほどわかった、**あなたは我が国の習慣を御存じないのだ。**こうなのです、**ここの習慣**

では、すべて生き残った夫は死んだ妻といっしょに生き埋めになり、すべて生き残った妻は死んだ夫といっしょに生き埋めになることになっているのです。これは侵すべからざることです！それでほどなく、私は死んだ妻といっしょに生き埋めにされなければならない。当地では王様をはじめ誰でも、この祖先の定めた掟に忍従しなければなりません」(豊島 1999 第五巻 S. 310)。

その後、シンドバードの妻も死に、「3 枚の蛇の葉」(KHM 016) と同様に、シンドバードは井戸に生き埋めにされる。そしてシンドバードは、後から生き埋めにされた人々を殺してまで生き延びるのである。そうこうするうちに、死骸を食う動物が開けた穴を見つけ出し、そこを通って再び地上に戻ることが出来る (豊島他 1999 第五巻 S. 314ff.)。ここでは、グリム兄弟の昔話とは違い、妻は生き返らない。

グリム兄弟が『千一夜物語』も同じ枠内で捉えていたことは、第 2 章第 4 節で考察した通りであり、上述のような一致も共通の源に由来すると考えていたのである。

「12 人の兄弟」(KHM 009) の継母は、最後に、煮えたった油と毒蛇の入った樽に投げ込まれて死んでいる。これは 1810 年手稿の段階から継母に下されている罰である。

ヴィルヘルムは『昔話集』第 2 版に載せた前書きの中で、「悪者に対する罰で、毒蛇の入った樽に投げ込まれるというのがあるが、これは、伝説の蛇の穴だけでなく、より明確にナーストレンド (死者の岸) を思い起こさせる」と述べている (W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 343)。

スノリの『エッダ』によれば、ナーストレンドには悪人のための (死後の) 館があるのだ。つまり、善良潔白な者は死後シンドリと呼ばれる館に住むことが出来るのだが、悪人が行く場所である。『エッダ』では次のように語られている。

> ナーストレンドには大きな館がある。しかし、これは悪い館だ。扉は北向きで、編み細工のように蛇の背骨で編まれ、蛇の首が室内に向いて毒を吹き出すので、毒の流れが館から流れ出る。そして、その川を偽証人と人殺しがかちわたる。次のようにいわれているとおりだ。
>
> 太陽より離れた
> ナーストレンド（死者の岸）に
> 館の建てるを
> われは知る
> 扉は北をむき
> 天窓より
> 毒液滴りおつ
> 館は蛇の背骨にて
> 編まれたり
> その重き川の流れを
> 偽証人と人殺しは

かちわたらざるべからず (巫女の予言) (谷口 1973 S. 279)。

ヴィルヘルムはかの前書きの続きで、「ロキの顔の上に蛇がすえつけられ、**蛇の毒**が垂れるようにされる」ところもこの関連だとしている (W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 343)。ロキはさまざまな悪戯や悪行を行ってきたが、ついにはバルドル[1]の死を招いたため、神々の逆鱗にふれ、そのような仕返しを受けるのであった。これもスノリの『エッダ』で歌われている。

> こうして、ロキは容赦なく捕えられ、とある洞窟のところにつれて行かれた。[...] すると神々はその腸をとって、それでロキを先程の三つの岩に縛りつけた。[...] それからスカジは**毒蛇**をつかまえてきて、**毒が蛇から彼の顔の上に滴り落ちるように、彼の頭上に結びつけた。**それから、ロキの妻のシギュンは、彼の横に立って、毒の滴の下に洗桶を支えている (谷口 1973 S. 274)。

毒蛇による罰は残酷であるが神話を髣髴とさせるものであり、また「12 人の兄弟」の継母も、様々な悪行を重ねているため、それにふさわしいとグリム兄弟は考えたのだろう。

グリム兄弟の昔話の中の残酷な罰については、さらに第Ⅲ部において、他の編者 (作者) による昔話との比較を通して、再び考察する。

本論第Ⅰ部の考察をふまえれば、グリム兄弟の昔話の中には、書きかえられていても不思議ではないものが数多く残っていることになる。しかし、そうしたものの中に、グリム兄弟が神話や古い伝承とのつながりを見出していたことを本章では詳しく考察してきた。つまり、伝承としての価値を見出したものは、道徳的でないとか残酷だといった非難を受ける可能性のあるものであっても『昔話集』に取り入れているようなのだ。言い換えれば、グリム兄弟の「昔話—神話観」が、『昔話集』の編纂方針に決定的な影響を与えているということになる。このことはこれまでグリム『昔話集』研究においてはきちんとした議論のなされてこなかった領域でもある。

そうした編纂方針によってまとめられた『昔話集』が、どういった点で他の編者 (作者) による昔話と異なっているのかということを、次の第Ⅲ部で具体的に見ていきたい。

---

[1] オーディンとフリッグの息子で、神々の中で最も美しく、賢く、上品な神で皆に愛されていた。